

山本眞一先生の職歴と専門的活動とお人柄

広島大学高等教育研究開発センター教授

大膳 司

この度、広島大学高等教育研究開発センターから一人の超人 山本眞一先生が退職される。

私が出会った、超人的な仕事をされる大学人にはいろいろなタイプの方がおられるが、山本眞一先生の超人的な面は、活動内容もそうであるが、特に、活動量にあり、それを支えている心身両面の強靱さがそうであり、突き詰めると、先生のまじめさにあるのではないだろうかと思っている。

様々な仕事をまじめにこなされる山本眞一先生には、次々と仕事が回ってきて、それをさらりとこなされていく様子を見てみると超人としか感じられない。

このように書くと、どの程度山本眞一先生を知ってそのように書くのか、と誇りを免れないかもしれない。というのも、私は、山本眞一先生が2006年に筑波大学から本センターに異動されてからの5年間しかお付き合いしていないからである。しかし、実は、私が山本眞一先生をはじめて認識したのは、先生が文部省に在職中に筑波大学大学院経営・政策科学研究科に在籍されておられた1979年に『教育社会学研究』第34号に発表された「大学進学希望率規定要因の分析」を通してであり、最初に直接お見受けしたのは、私が本センター前身の大学教育研究センターで助手をしていた1989年ではないかと思う。当時埼玉大学大学院政策科学研究科の助教授であった山本眞一先生が、大学教育研究センターの助教授だった金子元久先生を訪ねてこられたことを記憶している。そういう意味では、30年以上も山本眞一先生のご活躍をながめてきたということで、もう少し山本眞一先生についての記述をご容赦いただきたい。

先生は、1972年に東京大学法学部を卒業後、その年に文部省に就職され、東京大学事務局広報企画課長（1979年）、文部省大学局高等教育計画課課長補佐（1981年）、特殊法人・放送大学学園教務課長（1981年）、文部省初等中等教育局職業教育課課長補佐（1984年）、臨時教育審議会第二部会調査員（1986年）、文部省官房調査統計課課長補佐（1987年）、米国科学財団（NSF）客員研究員（1988年）を歴任後、埼玉大学、筑波大学を経て、2006年に広島大学高等教育研究開発センターに異動し、2007年から今年度末までセンター長を5年間ご担当いただいた。その間の2007年から2年間、日本高等教育学会長を務められた。

先生の研究業績の多くは『転換期の高等教育』『SD（スタッフ・ディベロップメント）が支える強い大学づくり』『知識社会と大学経営』『大学事務職員のための高等教育システム論』『大学の構造転換と戦略』など著書の形で公刊されている。政策と実践の両面から高等教育を考察してこられたことがうかがえる。

さらに、先生が本センターに来られて数種類のプロジェクトを実施してきた。2年間のプロジェクトから来年度まで続く5年間のプロジェクトまで多種多様であった。どのプロジェクトも高等教育政策形成に関わる重要なプロジェクトであった。これらのプロジェクトを通して感じた山本眞一

先生は、話をすると大変真摯に対応してくださり、自身の分担仕事は、大方のことは自身で即座に動かれて対応してくださる。

研究だけするのではなく、その成果を実践に生かすことが好きな方である。その結果、忙しくされており、月のカレンダーの7割は外からの依頼への対応で埋まっておられる。それでいて、元気な方で、先生が風邪を引かれて弱った様子を一度もお見受けしたことがない。そのような快活な山本眞一先生を嫌う方はおられないのではないか。

以上の文章内容に対して、山本眞一先生を表面的にしか見ていない、もっと山本眞一先生のことを調べてから執筆するように、との批判を受けるかもしれない。アトランタにある「まごころをお皿にのせて」を合い言葉に経営している BENIHANA（紅花）で広島大学の同僚と夕食を済ませた後のほろ酔い加減で脱稿したためにそうなったということで、お許しいただきたい。

ほんとうに広島大学高等教育研究センターの発展のために尽くしていただきまして感謝申し上げます。我々残された者は、先生から受けたバトンを次世代に無事引き渡せるようがんばっていきたいと思います。今後とも高等教育の発展のためにご尽力いただきますようお願い申し上げます。

2011年10月28日

アトランタから